

スリランカにおけるナーガラージャ像の展開

－インド・東南アジアと比較して－

On the Development of Nāgarāja Images in Sri Lanka

－ Comparing with the images of India and Southeast Asia －

金田 紗弥

Saya KANADA

崇城大学大学院芸術研究科修士課程美術専攻

Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University

キーワード：スリランカ、ナーガ、ナーガラージャ、インド、東南アジア、ムチリンダ、
ガードストーン

Keywords: Sri Lanka, Nāga, Nāgarāja, India, Southeast Asia, Mucilinda, Guard Stone

Summary

Nāga is cobra with some heads and nāgarājas are the king of nāga tribe. Nāga is a guardian in Buddhism. Nāga had played a role of prosperity and fertility of the land. In religious art nāgarāja is represented by a cobra and a human figure, among India, Sri Lanka, and Southeast Asia. Especially in Sri Lanka, nāgarāja is represented on the guard stones placed at the entrances of temples and royal palaces.

The purpose of this paper is to consider how the nāgarāja images in Sri Lanka developed, how they developed among India and Southeast Asia. Chapter 1 refers to nāgarāja and what its symbolism. Chapter 2 deals with the nāgarāja images from India, Cambodia, Thailand and Vietnam. We will also consider how they evolved in each region. Chapter 3 we will take up the examples of Sri Lanka and compare them with India and Southeast Asia in previous chapter, and consider their influence.

はじめに

稿者は、卒業論文「スリランカのガードストーン研究－ナーガラージャ型ガードストーンの様式による年代考察－」において、ナーガラージャ型ガードストーンの造立年代を大きく3期（7～8世紀、8～9世紀、12世紀）に分かれると結論づけた。ガードストーンは、仏教の守護や土地や時代の繁栄を象徴するものとしてスリランカの寺院や王宮趾の入口の両側に対になって表される浮彫で、ガードストーンの図像の中では最も新しく造立されたのがナーガラージャ型ガードストーンである。また、ガードストーンの中にはコブラの姿のナーガラージャを表すものもあり、人格化されたものと同等の役割を果たしている。では、それらのナーガラージャの図像はいつ頃スリランカに伝わり、展開し、さらに他国へ伝えられたのであろうか。ナーガラージャに関しては、ファーガッソンの *TREE & SERPENT WORSHIP*¹ で、各国のナーガについて詳しく述べられている。それらの中には、ナーガの造形について述べられているが、その展開については詳しく触れられていない。また、シュレーダーの *Buddhist sculptures of Sri Lanka*² では、スリランカのナーガ像の作例の図版が数多く掲載されているが、造立年代や設置場所などに言及するのみで、他国間への影響については言及していない。そのため本稿では、スリランカのナーガラージャ像がどのように展開したのか、さらにインドや東南アジアにはどのような作例があり、どのように展開したのか考察してみたい。

第1章では、そもそもナーガとはどのようなものであるのかやナーガが何を象徴するのか、どのような形で造形化されたかについて述べる。

続いて第2章では、インドと東南アジアにおけるナーガラージャ像の具体的な作例について、時代に沿って整理する。その上で、ナーガラージャ像は各国でどのように展開したのか考察する。

最後に第3章では、スリランカの具体的なナーガラージャの作例について、時代に沿って整理する。そして、ナーガラージャ像がスリランカ内でどのように展開したのかを述べ、前章での考察を踏まえた上で、インドとスリランカ及び東南アジアとの関係について考察したい。

第1章 ナーガについて

1-1 ナーガと水の関係

エリアーデ『エリアーデ著作集 第二巻 豊穡と再生 宗教学概論2』³によると、水は万物の母体であり、長寿と創造的な力を保証し、あらゆる治療の原理とも考えられている。さらに水は、大地や動物、女性を豊穡多産にするものの象徴でもある。このような水の象徴性は、全世界に共通して見られる。ワタタ島やトロブリアンド島、ニューメキシコのインディアンなどには、水は受胎であり生産を意味するという神話が存在している⁴。初めに水が存在し、そこから諸々の世界が生じたという伝承は、全世界に存在し、古代以来、相当のバリエーションが作られている。また、万物は水に溶けて形が崩れ、次第にその姿を失っ

ていくという考えから、水は、一切の形を崩し、廃棄、浄化の後に再び発生あるいは誕生させる力を持つともされてきた。そのため、伝承によれば古代世界では、造られた神像を一度水に浸して、水による再生を願ったという。例えば、体や髪を洗って清める沐浴の儀礼は、豊穡と農耕の女神に対する礼拝時に実修されるが、女神の力を回復し、豊作と財物の増加を保証させるものである⁵。龍や蛇、貝殻、海豚、魚などは、水の表象として表される。特に蛇は、常に水の近辺に生息しているため、水を支配していると考え、生命・不死・豊穡・英雄的行為・宝物などの守護神と考えられてきた。したがって、ナーガと水の関係性は深く、豊穡や多産、繁栄を象徴し、その土地や時代の豊穡や豊作を願う役割を担っていたと言えよう。

1-2 古代におけるナーガ信仰

ナーガとは、蛇、特に複数の頭部を持つコブラのことを示す。ナーガに対する信仰は、インダス文明において存在していたと推測され、アーリア人においては、古来より行われたナーガ信仰を受け入れ、半神の一つとしてみなすようになった。古くからナーガに対する信仰があったインドでは、前1500年頃、インド・ヨーロッパ語族のアーリア人が北西インドに侵入し、インド主要部を支配した。その過程の中で、インドの原住民に崇拜されていたナーガは、アーリア人の主神であったインドラに対する障害物としてみなされた。それでも土着のナーガ信仰は生き続け、やがて土着の信仰を受け入れた仏教の勃興に伴い、ナーガ

の信仰も本来の善神としての性格を持って宗教の表舞台に現れた⁶。さらにインドで衰退する仏教に代わって登場したヒンドゥー教では、最高神ヴィシュヌ像は海上に浮かぶアナンタあるいはシェーシャの褥の上で瞑想する姿で表され、シヴァも蛇を体にまとって表されることが多い。ヴィシュヌ像では、宇宙は周期的に創造や破壊を繰り返すとされ、その終末期の混沌とした海に横臥したヴィシュヌが瞑想し、宇宙の新たな創造を願うという神話がモチーフとされ、ナーガは大海を象徴するとされている。

1-3 ナーガとナーガラージャとは

ナーガは、水底の楽園や河川、湖、海の底、宝石や真珠をちりばめた光り輝く宮殿などを住まいとする。それゆえナーガは、地上の泉や井戸、池などの水に貯えられている生のエネルギーの保持者であると同時に、珊瑚や貝、真珠といった深海の富の守護者でもあるとされる⁷。民間には、仏教以前から土着のナーガ信仰があったが、ナーガは「ムチリンダ龍王の護仏」や「龍王護塔」などの仏教説話を通して、守護神として仏教に組み込まれ、造形化されてきた。前者の説話について、まず悟りを開いた仏陀は、3週間樹の下で座禅をしていた。3週目、仏陀はムチリンダ樹のもとで座禅をしていた際、暴風雨に見舞われた。そこでムチリンダ龍王は、仏陀の体を囲むように自分の胴体をとぐる巻きにし、自分の頭を傘のように仏陀の頭上に広げて仏陀を護ったという説話である。後者の説話は、インドのアショーカ王が、仏陀入滅後

に建立された8基の仏舎利塔から舍利を取り出し、新たな仏塔を建立しようとしてラーマ村の仏塔を壊そうとした。しかし龍王が仏塔を守護したため、王は壊すのを諦めた、という伝説である。仏教においてナーガは、特にこれら2つの説話が数多く造形化されてきた。また、ナーガは天龍八部衆の1つでもある。他にも、仏陀誕生の際にナンダ・ウパナンダの二龍王が灌頂した「龍王灌頂」や菩提樹の下に坐した仏陀にカーラ龍王が賛歌を捧げて礼拝した「菩提座賛歌」、初転法輪の地サールナートにおける「エーラパトラ龍王の礼仏」などに登場する龍王たちもナーガであり、このようにナーガは、仏伝中で様々な形で仏陀の生涯に関与している。

その中でも、ナーガラージャとは、「ナーガ=蛇」の「ラーージャ=王」を意味し、コブラの姿や人間の姿で表現される。前者の場合にはナーガの頭上に傘が表現され、後者では頭部に龍蓋があることが特徴である。後者の場合には、ナーガラージャは王に相応しい豪華な装身具を身につけた姿で表される。前述の仏伝中に登場する龍王たちもナーガラージャである。

以上のように、ナーガは仏教の守護神、そして豊穰や多産、繁栄を象徴するものであった。次章からはナーガがどのように造形化されたのか、作例を挙げてみていく。

第2章 ナーガラージャの作例

本章では、スリランカの周辺のインドと東南アジアの国々におけるナーガラージャ像の作例にどのようなものがあるのか確認

し、時代を追って整理する。ナーガラージャの造形には2種類見られる。まず、コブラの姿で表される場合がある。これは、ナーガ単体の像やムチリンダ龍王の護仏などが含まれる。次に、人格化して表される場合、つまり人間の姿をした龍王の頭部に龍蓋があるものを示す。ナーガラージャ像は大きくこの2種類に分かれるが、調査の結果、ムチリンダ龍王の護仏の作例が比較的多かったため本章では、インドと東南アジアの作例について、①コブラ型（ナーガ単体像）、②人格化型、③ムチリンダ型の3種類についてみていく。

2-1 インド

インドで最も早くナーガラージャ像が登場するのは、前2世紀末のサーンチー第2塔欄楯円形装飾においてである。ここでは①コブラ型が見出され、龍蓋を扇状に広げ、円形装飾の中に収まるように尾をうねらせている。通常ナーガは、尾を左右に8の字のように巻くかどぐろを巻くことが多く、本作のように円形装飾中にナーガを表現し、尾を畳むように表す例はこれ以降見出せなかった。

次いで前1世紀から後3世紀にかけて、バールフットやカナガナハハリ、アマラーヴァティーでもそれぞれの種類の作例が見出されるようになる。前1世紀のバールフットで見出された②人格化型の作例（図1）は、柱の側面に浮き彫られ、正面に大きな珠飾りがあるターバンを被り、豪華な装身具を身につけたナーガラージャ像で、胸の前で合掌して直立している。

前1世紀のパウニで見出された石柱は、

③ムチリンダ型のものである⁸。柱には3面に浮彫があり、中央に龍蓋を広げたナーガが聖壇を取り囲んでいる。上方には菩提樹が表され、仏陀を象徴する聖壇や菩提樹を守護する表現によってムチリンダ龍王の護仏を表していることがわかる。

カナガナハリでは、仏伝図などが浮き彫りされた数多くの石板の破片が発見されている。その中にはナーガラージャを表したものもあり、3種類すべての作例が見出される。①コブラ型の作例では、ナーガは5つあるいは9つの龍蓋を扇状に広げ、龍蓋から尾にかけての途中に首飾りをつけている(図2)。尾は下部で一度円を描き、左右で4回巻いて立ち上がる姿勢を執っている。これらの作例にはナーガの上部に傘を表現するものがあり、ナーガを信仰の対象としていることがわかるが、K. P. Poonachaの*Excavations at KANAGANAHALLI (Sannati, Dist. Gulbarga, Karnataka)*によれば、同様の構図の作例をナーガラージャ像ともムチリンダ龍王ともしている⁹ため、どちらが適切であるかは研究の余地がある。さらに、カナガナハリで見出された作例の中には、仏陀を象徴する仏塔にナーガが巻きついて守護するムチリンダ龍王の護仏を表現したものもある。それらの中には、「ラーマグラマ仏塔」と見なされた石板があり、龍王護塔の説話を表現している¹⁰。このように仏塔の覆鉢部分にナーガが巻きつくものや仏塔の正面に立ち上がったナーガを表す作例は一般的に、仏陀を象徴する仏塔をナーガが守護する構図からムチリンダ龍王の護仏を象徴していると考えられるが、龍王護塔を表現している作例は

珍しい。作例を見た限り、龍王護塔を表現していることが明白な作例はカナガナハリの1点のみであったが、カナガナハリの作例においては、説話と解釈されているため、前述のナーガラージャ像あるいはムチリンダ龍王を表す作例とともに、今後の研究の中でそれらの図像が何を表すか明らかにできればと考える。

南インドのアマラーヴァティーでは仏塔図を表した浮彫が数多く見出されており、後2世紀から3世紀にかけては、仏塔をナーガが守護する作例も多い。特に後2世紀の《ナーガに守護されるストゥーパ》には、③ムチリンダ型と②人格化型のナーガラージャが表現されている(図3)。中央の仏塔の覆鉢部分に5つ頭のナーガが3体巻きつき、下部の基壇は3区画に分けられ、それぞれの区画に尾をうねらせて体を起こした状態のナーガが表されている。さらに、仏塔の両脇には、最下部に跪いて頭上で合掌するナーギニー、その上部に立つナーガラージャ、さらに上方には子供のように背が低いナーガラージャが飛翔し、それぞれ左右対称に表されている。ナーガラージャは、王に相応しい豪華な装身具を身につけている。本作例は、ナーガラージャ像をコブラの姿や人格化した姿で多様に表し、ナーガラージャが仏教の守護神であることを強く示している。

また、ナーガールジュナコンダの仏伝図には③ムチリンダ型の浮彫が見出される¹¹。石板は3区画に分かれ、最下部の区画の向かって右側に、5段に巻いたとぐろの上に仏陀が坐す。仏陀の向かって左側には、仏陀に向かって合掌する5人のナーギニーが

表されている。とぐろの上に仏陀が坐すムチリンダ型の中では最も早い段階の作例である。

2世紀後半の②人格化型の作例は、マトゥラーから出土している¹²。本像のナーガの頭部は、ほぼ均等の大きさで、すべてが正面を向いている。さらに鼻先は馬のように突起し、鼻孔が大きく表される。この点は他の人格化型の作例またはインドの他の種類の作例においても他に見られない造形となっている。

5世紀には、アジャンター第19窟の入口に②人格化型のナーガラージャ夫妻の浮彫が施されている(図4)。7つ頭の龍蓋を持つナーガラージャ像は、台座に座り、右脚を台座上に上げ、輪王坐の姿勢を執り、これまでに登場したナーガラージャ像と同様に豪華な装身具を身につけている。アジャンター石窟には、第19窟以外に②人格化型のナーガラージャ像を散見することができる。

6世紀以降は、ヴィシュヌが横臥するシェーシャ・ナーガとしてヒンドゥー神話の浮彫に登場するようになる。7～8世紀のヴィシュヌの浮彫では①コブラ型が、9世紀のクリシュナ像などにおいて②人格化されたナーガラージャの姿がたびたび登場する。

2-2 東南アジアのナーガラージャ像

続いて、東南アジアで主要な作例が見出されたカンボジアとタイ、ベトナムの3か国の作例を見ていく。

2-2-1 カンボジア

カンボジアでは、遠い祖先が龍であるという伝説が伝わっており、ナーガの造形物が数多く残されている。カンボジアのクメール人の王朝の全盛時代であった9～15世紀には、インド文化の影響を受けた壮大な建造物が数多く建立された。特に1113年、スーリヤヴァルマン2世が完成させたアンコール・ワットには、入り口や欄干、回廊などにナーガ像が見出される。ナーガ単独の彫像やムチリンダ像は、アンコールの他の王城や寺院にも置かれ、カンボジアの各地で見出されている。

カンボジアで最初にナーガ像が登場するのは、リントルと呼ばれる祠堂や楼門の入口上部を装飾する建築部材の浮彫上においてである。6～7世紀のサンボール・プレイ・クックのリントル¹³には、中央の踊り子や演奏者群の両脇に、やや筋肉質で5つ頭の龍蓋を持つ②人格化型のナーガラージャが足を交差させて坐している。装身具は、頭部にターバンを巻き、大きな耳環をつける程度で、インドで見出されたナーガラージャ像と比較すると豪華さは見取れない。本図のナーガラージャは、建物の入口を飾る部材の両脇に対で示され、やや筋肉質な姿で表されているため、ナーガ崇拝というよりは、装飾的に建物の守護に当たるものとしての役目の方が強く与えられていると推測する。

その後9～11世紀にかけてリントルやリントル上部の三角形の装飾であるペディメントにおいて①コブラ型のナーガ像が見出される¹⁴。これらは6～7世紀の作例と同様に、リントルやペディメントの両脇に対で

表され、建物の守護神としての役割を担っていたと言えよう。

カンボジアでは10世紀～11世紀から、③ムチリンダ型が登場する。プノン・スロック付近で見出された《仏教の奉献塔》¹⁵は、4面に龕を開いて仏像を表し、そのうちの1面にムチリンダ龍王上に坐す仏陀像が表される。2段に巻いたとぐろの上に仏陀が坐し、その背後で7つ頭の龍蓋を広げ、ナーガの頭部は破損している。インドのナーガ像と比べて、やや縦長に伸びるのがカンボジアのナーガ像の特徴である。

11世紀にペアン・チュンの農園から③ムチリンダ型の単独像が発見されている(図5)。3段に巻いたとぐろの上に仏陀が坐し、7つ頭の龍蓋を広げる。龍蓋は二等辺三角形を作るように各々の首が一体化され、頂上の頭部が最も大きく、頂上の頭部のみ正面を向き、他の頭部は上向きである。カンボジアのナーガ像の頭部は馬のように鼻先が突起し、鼻孔が大きく、コブラよりも、カンボジアで好まれた馬の顔を持つヴァームジカ¹⁶の頭部に近い。

12世紀後半の作例¹⁷は、前述の作例と同様に3段にとぐろを巻いたナーガの上に仏陀が坐し、ナーガは仏陀の頭上で7つ頭の龍蓋を広げる。ナーガ像は、以前のムチリンダ型の作例よりも、胴体が平面的でやや形式化されており、時代が下ったカンボジアのナーガ像の特徴となっている。さらに、本像の仏陀は、人格化されたナーガラージャのように豪華な装身具を身につける。カンボジアにおけるムチリンダ型の作例では、冠帯と頂髻の表現は12世紀前半から見られるようになるが、このように豪

華な装身具をつける作例は数少ない。

アンコールのプレア・カンから出土した作例は、12～13世紀に造られたもので、龍蓋の上部と仏陀の下半身から下部が失われているが、仏陀像の螺髪表現からバイヨン期の作例であると考えられている¹⁸。本像と同様にバイヨン期の作例で本像より一回り大きいものが、都であったアンコールの中心寺院であるバイヨンの中央祠堂地下から発見されており、ムチリンダ龍王上に坐す仏陀像が当時最も重要な尊格の一つとして安置されていたことがわかる。

12世紀には、ムチリンダ型以外の①コブラ型の像も見出される。プレア・カンの東参道の両脇に、2～3mほどの巨大なナーガを先頭とし、デーヴァがナーガを両手で支え、後方に連なるアスラたちが長く続くナーガの尾を綱引きのように両手で支えて一列に並んでいる欄干がある。巨大なナーガ像の頭部は全ての頭部が正面を向いている。本像は口を少し開き、歯と歯の間から舌を覗かせ、獣のような顔立ちをしている。胴体の中央には円形の大きな珠飾りをつけ、7つの頭部それぞれも首飾りをつけている。同様のものがアンコール・トムの前にも見られる。本像のモチーフは、ヒンドゥー神話の乳海攪拌¹⁹の場面から取り上げられ、クメール美術では好んで造形化された。

このようにカンボジアでは、12～13世紀に特に③ムチリンダ型の作例が盛んに制作されたことがわかった。

2-2-2 タイ

タイは、隣国カンボジアのアンコール・

ワット様式やバイヨン様式などのクメール美術や13世紀のスコータイ朝の時代にスリランカ美術の影響を多大に受け、数多くの仏像が制作されている。しかし、ナーガラージャ像に関する作例は極めて少なく、今回確認できたのは全て③ムチリンダ型の作例のみであった。タイで最も早くムチリンダ型のナーガラージャ像が登場するのは7世紀で、龕の中に坐す仏陀像²⁰においてである。本像では、カンボジアで見られたムチリンダ像とは異なり、とぐろがなく、仏陀の頭部周辺に7つ頭の龍蓋を広げる作例となっている。頭部は全て正面を向き、カンボジアの作例より鼻の突起は控えめである。また、仏陀の両脇には小仏塔が添えられている。

7～8世紀の、別の場所からワット・プラドゥーソンタムに移されたとされる③ムチリンダ型の作例²¹では、ナーガはとぐろ上に坐す仏陀の頭部周辺に7つ頭の龍蓋を広げる。本像のナーガも前述のナーガも、カンボジアの作例では上部に向かって縦長に伸びていたのに対し、タイの作例は扇のように横に広がっている。また、本像の仏陀の両脇下部にはしゃがんだ小人が片手で小仏塔を持ち上げており、仏陀の両脇に小仏塔を表す点は共通している。

そしてやや時代が飛び、12～13世紀のワット・ウィアンに伝来した作例(図6)は、3段に巻いたとぐろ上に仏陀が坐し、ナーガは7つ頭の龍蓋を広げている。龍蓋は一体化し、鼻先が突起し、大きな鼻孔を表しており、カンボジアのアンコール期の様式を継いでいる作例である。

その後の13～14世紀の胸像のナーガ²²

は、頂上の頭部が失われ、全体的に磨耗している。わずかに残る輪郭から、龍蓋が一体化していることや頂上以外の頭部が上向きであること、鼻先が突起していることがわかり、アンコール期のナーガ像の特徴を受け継いでいる。

以上のように、タイで確認できた作例は僅少ではあるが、12、13世紀以降はカンボジアのクメール美術の中でもアンコール期の様式を継いだ作例が見出され、カンボジアからの影響が濃いことがわかった。

2-2-3 ベトナム

タイ同様、ベトナムの作例も極めて少なく、今回の調査で確認できたのは2点の③ムチリンダ型の作例のみであった。

1点目は6世紀の作例とされ、3段に巻いたとぐろの上に細身の仏陀が坐し、ナーガは仏陀の頭上に5つ頭の龍蓋を扇形に広げている(図7)。本像のナーガの頭部は磨耗して詳細は不明であるが、ナーガの輪郭はタイの7～8世紀の作例に類似する。

2点目は12世紀の作例で、11世紀以降のチャンパ王国の都が置かれたビン・ディンの寺院から出土している。3段に巻いたとぐろの上に豪華な装身具を身につけた仏陀が坐し、龍蓋は一体化し、鼻先が突起し、頂上の頭部のみ正面を向き、他の頭部は上向きというアンコール期の特徴を継ぎ、さらに龍蓋の装飾が豪華な作例である。

確認できた作例は非常に少ないが、タイと同様にカンボジア12世紀頃にカンボジアのクメール美術の影響があったことは間違いない。

2-3 小結

以上のように、インドや東南アジアの各国でさまざまな種類のナーガラージャ像を確認することができた。その上で、各国のナーガラージャ像の展開や特徴をまとめてみたい。

まずインドでは、①コブラ型と②人格化型の作例が最も早く、前2世紀に登場する。その後前1世紀から後3世紀にかけて、①コブラ型と②人格化型、③ムチリンダ型のすべての種類の作例が見られるようになる。5世紀以降になると、仏伝図やヒンドゥー教の像などにおいて、①コブラ型と②人格化型の作例が主に表され、③ムチリンダ型の作例は姿を見なくなる。地域的な分布を見ると、初期はサーンチャーやパールフットなどの北側、1～3世紀にはアマラーヴァティーなどの南インドで多く見られるが、その後は各地域で作例が確認でき、地域的な偏りは見られなかった。インドのナーガラージャの造形は、いたってシンプルである。ナーガの頭部の数は5つである場合が多く、頂上の頭部のみ正面を向き、他の頭部は頂上の頭部の方を向く。①コブラ型の龍蓋は一体化されずに頭部1つ1つが重なり合うように表現されるが、②人格化型の作例は頭部が一体化されて表現され、時代が下るにつれて①コブラ型のようにそれぞれの頭部を重なり合うように表現するようになった。

続いて東南アジアで最も多くの作例が確認できたカンボジアでは、6～7世紀のリンテル上に見られる②人格化型が最も早く登場する。その後10世紀のペディメント上に①コブラ型のナーガが、11世紀には

③ムチリンダ型の作例が表されるようになり、12～13世紀には最盛期を迎え③ムチリンダ型の作例が数多く造られた。地域性については、時代や地域による偏りは特に見られず、カンボジアの各地で見出されていることがわかった。カンボジアのナーガ像は、7つの頭部を持つ場合が大半で、龍蓋は縦に長く広がっている。龍蓋は一体化され、ナーガの鼻先は馬のように突起し、鼻孔が大きく表され、頂上のナーガは正面を向き、他のナーガは上向きである点もほとんどの作例において共通している。また、胸元に円形の珠飾りを施すのもカンボジアのナーガ像の特徴である。造形の展開に大きな変化は見られないが、時代が下るにつれて表現が平面的でやや単調的になり、次第に形式化していることがわかった。また、カンボジアでは、仏塔を守護する構図のムチリンダを表した作例は見られなかった。

タイでナーガ像が最も早く登場するのは6～7世紀でカンボジアと同時期であり、③ムチリンダ型の作例である。その後12～14世紀にも同様の作例が見られ、タイではムチリンダ型の作例のみが確認でき、地域的な偏りは見られなかった。しかし、前者はドヴァーラヴァティー期、後者はバイヨン期という様式的な相違が見られた。タイのナーガの造形は、2種類に分かれる。一方は、小さめの頭部は1つ1つが重なり合うように表され、全て正面を向き、鼻先の突起は控えめなもの、もう一方は、頭部が一体化され、頂上の頭部のみ正面を向き、他の頭部は上向きで鼻先が突起しているものである。前者はインドの作例に、

後者はカンボジアの作例に類似している。

ベトナムで確認できたのは2点のみで、最初に登場する6世紀の作例と12～13世紀の③ムチリンダ型の作例である。地域的には、両者とも当時の都があったヴィジャヤの近辺から出土している。両者ともムチリンダ型の作例であるが、造形に関してはタイと同様の2種類に分かれ、他国からの影響が及んでいることがわかった。

第3章 スリランカのナーガラージャ像の展開

前章まで、ナーガラージャの概要や象徴性、インドと東南アジア各国におけるナーガラージャ像の作例にどのようなものがあり、各地の作例の特徴や与えた影響を整理してきた。本章では、インドと東南アジアを結ぶスリランカにおける作例にどのようなものがあり、他国からまたは他国へどのような影響を与えられ、与えたかを考察する。なお、本章におけるスリランカの地名のカタカナ表記については、東京国立博物館『特別展 スリランカ 輝く島の美に出会う』展図録²³に依る。

3-1 スリランカの作例

まず、スリランカにおけるナーガラージャ像の作例を、時代を追って整理する。スリランカで最初に登場するのは、1世紀～2世紀に造られたとされたミヒンタレーにおける②人格化されたナーガラージャ像(図8)である。本図は、カンタカチャーティヤという仏塔の四方に突き出た構造物であるワーハルカダ(南側)の両脇に対で

刻まれた浮彫である。ナーガラージャ像は像の頭部の周りに龍蓋の輪郭が残り、胸前で合掌して直立している。同仏塔の他の側面のワーハルカダにはナーガラージャ像は見られず、仏塔への階段を上って正面になる南側のみに見られることから、仏塔の守護神として両脇に添えられたものと推測する。

2世紀のアンバラのディーガヴァーピチャーティヤのワーハルカダの柱にも②人格化されたナーガラージャ像の浮彫²⁴が見出される。本図のナーガラージャは、腰布や腰帯を巻き、宝冠を被り、腕釦などの装身具を身につけ、向かって右方に腰を曲げ、体全体もやや右方を向く。左手は腰に当て、右腕を顔前まで上げているが、持物は不明である。また、本図のナーガラージャには頭上に傘(?)が差されている。同仏塔のワーハルカダの他の部分について詳細は不明であるが、ミヒンタレーのナーガラージャ像が対で表されていたため、向かって左を向く対になるものがあるかどうか、検討課題としたい。

2～3世紀には、①コブラ型の作例も登場する。アヌラーダプラのアバヤギリから出土した作例²⁵は、①コブラ型の丸彫像で、①コブラ型の中でも唯一の丸彫像である。5つ頭の龍蓋を扇状に広げ、尾を左右に1回ずつ巻き、下部で尾の先を左に向かって流している。龍蓋の広げ方や尾の巻き方はインドのカナガナハッリの①コブラ型の作例と類似するが、本図の尾の巻きの方が1段少ない。

3～4世紀には、アヌラーダプラから出土した②人格化型と③ムチリンダ型を組み

合わせた浮彫（図9）が見出されている。本図は、前述のナーガールジュナコンダの浮彫のように、南インドのアーンドラ地方で制作されたものとされている。本図の中央に、3段に巻いたとぐろの上に仏陀が坐し、ナーガは7つ頭の龍蓋を扇状に広げる。仏陀像の両脇には、楽器を奏でたり胸前で合掌したりする龍蓋を持ったナーガラージャが向かって左側に2人、右側に3人立っている。

また、3～4世紀の作で、南インドのナーガールジュナコンダから出土した①コブラ型の作例があり、シュレーダーによれば、初期アマラーヴァティー様式の作とみなされている²⁶。2～3世紀の①コブラ型の作例の尾の巻き方は1段であったが、本図の巻き方は2段で、この後スリランカで見られる同様の種類の作例も2段であり、龍蓋の重なり方など酷似する点が多く、本図は3～4世紀以降の①コブラ型の作例の祖型となったと推測できる。

同時期のスリランカでは、特にアマラーダプラのジェータヴァナで数多くの①コブラ型のガードストーンがジェータヴァナ仏塔のワーハルカダの一部として見出される。ジェータヴァナから出土している作例は、7つの頭部を持ち、胸元に首飾りをつけ、尾を左右に2回ずつ巻いて起き上がる姿勢で、上部に傘が表現される点で共通している。また、アマラーダプラから少々南に下ったアウカナ寺院でも、同様の作例²⁷が確認され、3～4世紀のアマラーダプラ周辺の地域で同様の①コブラ型の図像が広がっていたことがわかる。

また、同じ①コブラ型の作例でも、異な

る図像の作例が同時代に見出されている。アマラーダプラから持ち込まれ、ポロンナルワで発見されたとされる作例²⁸は、ほぼ正方形の石板の中央に5つ頭の龍蓋を持つコブラ型ナーガが、尾を左右に2回ずつ巻いて身を起き上がらせた姿で表されている。ナーガの頭上には傘が差され、両脇に台座の上に坐す人の姿のナーギニーを従えている点が特徴的である。出土地は不明であるが、同様の構図の作例がもう1点見出されており²⁹、こちらには傘はなく、半円形の石板上に刻まれている。

この時代には、②人格化されたナーガラージャ像も見出されており、アマラーダプラのルワンウェリサーヤやアバヤギリ、ジェータヴァナの各大仏塔のワーハルカダの柱の一部に刻まれている。ナーガラージャは、耳璫や腕釧、臂釧、腰布、腰帯、足釧など豪華な装身具を身につけている。前述のディーガヴァーピ仏塔で見られたものと同様に、これらの作例のナーガラージャ像も正面ではなく腰を左右いずれかに突き出し、体も左右いずれかの方向にやや向ける姿勢を執っている。今回は写真資料のみの考察であったため、それぞれのワーハルカダのすべての浮彫を確認することはできず一部のみであったが、体を向ける先はワーハルカダの中央を示し、反対側にも同様の姿勢を執るナーガラージャ像が刻まれていることが推測される。

その後5世紀には、シーギリヤで①コブラ型の作例が2点見出される。1点目は、これまでに見られた作例と類似するが、7つ頭の龍蓋は一体化し、円を描くような輪郭をしている点が特徴的である³⁰。2点目

は、円形の石板上に小さなナーガが、体全体で軽く円を描くように刻まれている非常に珍しい造形の作例である³¹。

6世紀に入ると、アヌラーダプラを始めスリランカ各地の寺院や王宮の入口に対で造られたガードストーン上に、②人格化されたナーガラージャが表されるようになった。ガードストーン上のナーガラージャは、豪華な装身具をつけ、入口の中央の方の腕を肩まで上げ、その手で花が咲き乱れた満瓶を、もう一方の腕は軽く曲げ、腰の横辺りで、先に花が咲いた茎を掴んでいる。そして、ワーハルカダのナーガラージャ像のように建物の中心の方に腰を突き出しているが、体は正面を向いている。この時代のガードストーン上のナーガラージャ³²は、広い肩幅に比べてウエストの絞り具合が極端であり、的確な人体表現とは言い難い。

7世紀には、③ムチリンダ型の作例が見出される。トリンコマリーのカンタレーで発見された作例は、3段に巻いたとぐろの上に仏陀が坐しているものであり、ナーガの9つ頭の龍蓋は円を描くように一体化している。龍蓋の頭部は損傷が激しいが、わずかに残る頭部は小さく、前述のシーギリヤで発見された1点目の①コブラ型の作例の龍蓋の形と酷似している。

8世紀に造られたセールウィラ出土の③ムチリンダ型の作例(図10)は、3段に巻いたとぐろの上に仏陀が坐し、ナーガは9つ頭の龍蓋を広げる。カンタレーの作例と構図は同様であるが、ナーガのそれぞれの頭部が重なるように表され、表現が次第に精緻になっている様子を窺い知ることがで

きる。

8～9世紀には、②人格化型のナーガラージャ型ガードストーンが数多く造られ、最盛期を迎えた。稿者の卒業論文において、ガードストーン上のナーガラージャは、時代が下るにつれて人体表現や装身具などに多少ではあるが変化が生じ、次第に精緻な表現が施されるようになり、その造形は3期に分かれることを述べた。その中の第2期にあたる8～9世紀のラトナパーサーダの作例(図11)は、姿勢や持物は6世紀の物と同様で、三角錐の宝冠を被り、首飾りや胸飾り、腕釧、臂釧、腰布、腰帯、ウダラバンダ、聖紐などの豪華な装身具を身につけている。さらに、腰布の衣紋線の美しい表現や、ウエストを緩やかに絞り、胸元の起伏や腰帯にかかる贅肉など肉体表現に優れたものである。8～9世紀は、スリランカ美術における的確な人体表現が確立された時代であり、ガードストーン上のナーガラージャの表現もより精巧なものとなった。

9世紀には、エッパワラから②人格化型のナーガラージャの立像が出土している。本像の両肩上の房状の塊や、肩の前まで上げて何かを掴むように軽く拳を握った右手、腰の前で小さな壺を持った左手、腰布が非常に短い点など、スリランカで見られるナーガラージャ像と異なる点が多いため、スリランカ以外から持ち込まれた可能性がある³³。

10世紀以降は、①コブラ型と③ムチリンダ型の作例は見られなくなり、②人格化型のナーガラージャ型ガードストーンのみが見られる。10世紀以降のナーガラ

ジャ型ガードストーンは、特に12世紀のポロンナルワのワタダーゲーやランカーティラカなどの寺院で数多く見出される。

3-2 スリランカにおけるナーガラージャ像の展開

－インド・東南アジアと比較して－

以上、スリランカにおけるナーガラージャ像の作例を挙げてきた。スリランカで最も早くナーガ像が登場するのは1～2世紀の仏教伝来の地ミヒンタレーであり、②人格化型である。その後、当時の都であったアヌラダプラに大仏塔が造立され始めると、仏塔の構造物のワーハルカダの一部として①コブラ型や②人格化型の作例が見られるようになった。そして時代が降り6～8世紀まで、③ムチリンダ型やガードストーン上の②人格化型の作例が多く見出される。③ムチリンダ型は8世紀頃まで姿を消すが、②人格化型は、特にナーガラージャ型ガードストーンは遷都したポロンナルワにおいて、インドのチョーラ朝に支配されるまでの12～13世紀まで継続的に見られる³⁴。地域的に見ると、当時の都であったアヌラダプラ周辺でほとんどの作例が継続的に発見されており、ポロンナルワ以南は未調査のため、今後の研究課題である。ナーガの龍蓋の造形に関しては、インドと類似して比較的シンプルである。頭部の数は5つあるいは7つが多く、龍蓋は、コブラ型の場合は円を描くような形あるいは扇状に広がり、人格化型の場合は三角錐の宝冠を被っているためやや縦長に広がる。ナーガの頭部は小さく、1つ1つの頭部が重なり合うように表現されている。時代が下るにつ

れて次第に精緻な作例が多くなるが、以上のようなナーガの造形の基本的な要素は大きく変化しないことがわかった。

以上のことから、各国間で与えた影響について考えてみよう。その上で、これまで見てきたナーガ像の龍蓋の表現を見てみると、大きく分けて以下のAとBの2つのタイプに分かれる。

この点は、①コブラ型と③ムチリンダ型の作例に適応し、それを踏まえて考察する。

- | |
|--------------------------------------|
| A、頭部が小さい、各頭部が重なり合う表現、扇状に広がる |
| B、頭部が大きく鼻先が突起している、龍蓋が一体化している、縦に長く広がる |

ナーガラージャ像が登場する時代に関しては、最も早いのがインド（前2世紀）、次いでスリランカ（1～2世紀）、最後に東南アジア各国（6～7世紀）の順である。ナーガの種類別に見てみると、①コブラ型は、インド（前2世紀）→スリランカ（2世紀）→カンボジア（8～9世紀）で、②人格化型は、インド（前2世紀）→スリランカ（1～2世紀）→カンボジア（6～7世紀）、③ムチリンダ型は、インド（前1世紀～後3世紀）→スリランカ（3～4世紀）→タイ、ベトナム（6～7世紀）→カンボジア（11世紀）というようになる。

まず①コブラ型について、インドで登場して少し期間が空いてスリランカへ伝わったように見えるが、造形的な面から見ると、スリランカのナーガ像と類似する作例がインドで見出されたのは前1世紀～後3世紀の間であるため、それほど期間は空いておらず、両国のナーガもAの特徴を持つ

造形をしており、インドからスリランカへほとんど同様の形で伝播したことがわかる。しかし、カンボジアで見られるコブラ型の作例は、Bの造形に近いが、獣のような顔をしており、インドやスリランカのコブラ型の造形がそのまま伝わったとはいえ、カンボジア独自で発展した形といえよう。

次に②人格化型については、前2～1世紀にインドで確認され、スリランカへ後1～2世紀に伝えられた。スリランカの仏塔に見られるワーハルカダは、他国の仏塔には見られないスリランカ独自のものである。しかし、ワーハルカダは、入口を示すと言われ、南インドの仏塔の四方に突き出すアーヤカ台がその前身であると考えられている³⁵。さらに、ワーハルカダに刻まれる様々な文様も、アマラーヴァティーやマトゥラーなどインドに起源があるとされ、特にカンタカチューティヤのナーガラージャ像においても、パールフットのナーガラージャ像の影響が示唆されている³⁶。その後スリランカでは、ワーハルカダの柱やガードストーン上に②人格化型のナーガラージャ像が数多く見出されるようになるが、東南アジアではカンボジアの6～7世紀のリンテル以外全く作例が見られない。また、特にスリランカのガードストーン上のナーガラージャは、対で表され、非常に豪華な装身具を身につけ、建物の入口中央に腰を突き出し、片手で満瓶を持ち上げ、もう片方で花が咲く茎を掴むという特徴的な姿勢を執っている。インドの初期の作例も装身具をつけているが、スリランカのものほど豪華とはいえ直立している。インドの作例中では5世紀後半のアジャンター

石窟寺院で散見されるナーガラージャ像と最も類似する(図12)。さらに、アジャンターで見出される作例は、部屋の入口の柱に対で表され、入口の中央に向かって腰を突き出し、中央の方の腕を肩まで上げ、もう一方の手は腰に添えている。持物は異なるが、装身具の豪華さや姿勢に関しては非常に酷似しており、インドの5世紀後半の表現がスリランカのガードストーン上でも適応されたと推察する。さらに、ナーガラージャ型ガードストーンは、12世紀まで継続的に発展し、スリランカ独自の表現となっていた。

最後に③ムチリンダ型については、この主題がインドからスリランカへ伝わるまでにそれほど期間は空いていない。ただしこのスリランカの作例は、南インドのアーンドラ地方で制作されたものがスリランカへ持ち込まれたものとされている³⁷。当時の南インドでは、前述のナーガールジュナコンダの浮彫のようにとぐろ上に仏陀が坐す作例が制作されており、スリランカへ持ち込まれた作例によって、3世紀にスリランカに仏陀を守護するムチリンダの作例が伝わった。その後スリランカで同様の作例が登場するのは6～7世紀になってからである。ここで見られるナーガの造形は、Aに近いものが多い。同時期にはタイとベトナムでも同種の作例が確認でき、両者とも造形はAに近い。東南アジアに仏教が伝来したのは5～6世紀で、特にタイは早くからカンボジアのクメール美術、特にアンコール期の影響を色濃く受けていた。しかし、同時期にカンボジアでムチリンダ型の作例が確認されていないため、南インドやスリ

ランカの作例が主に伝播したと考えられよう。そして11～13世紀にカンボジアで盛んに同種の作例が造られるようになる。カンボジアのナーガの造形はBの表現で、アンコール・ワット様式、バイヨン様式の中で独自に発達を遂げたと推察する。

おわりに

スリランカでは、コブラや人間の姿で表されたナーガラージャ型ガードストーンが古代から長期間にわたって数多く見出される。しかし、ナーガラージャの図像がいつ頃伝来し、どのように展開したのか、さらに他国間でどのような影響を与え、展開したのかはこれまで明らかにされてこなかった。そのため本稿では、スリランカのナーガラージャ像を中心として、インドやカンボジア、タイ、ベトナムの東南アジアの国々の作例を時代や種類によって整理し、それぞれの国内さらに各国間での展開の様子を考察した。具体的な考察の順序は以下の通りである。

第1章では、まずナーガは水と深く関係し、豊穡や多産、繁栄を象徴し、その土地や時代の豊穡や豊作を願う役割を担っていたことを述べた。そして古代における蛇信仰が仏教に組み込まれナーガとして篤く信仰されたことやナーガとは何か、ナーガに関する説話について述べた。

次いで第2章では、インドとカンボジア、タイ、ベトナムの4か国のナーガラージャの作例について、ナーガラージャ像を①コブラ型、②人格化型、③ムチリンダ型の3種類に分けて整理した。その結果、イ

ンドでは前2～後1世紀から、サーンチャーやパールフットにおいて3種類全ての作例が見られ、時代が下るとアマラーヴァティーなどの南インドで多くの作例が見られるようになる。東南アジアでは、6～7世紀以降、③ムチリンダ型の作例が好まれ、特に10世紀以降、カンボジアで数多く見出されることがわかった。

最後に第3章では、スリランカのナーガラージャ像の作例を整理し、1～2世紀に①コブラ型と②人格化型の作例が見出され、③ムチリンダ型は3～4世紀にインドのアーンドラ地方で制作されたものがアヌラダプラで見出され、インドからスリランカへ図像が伝播されたことがわかった。2～3世紀にはワーハルカダに付随する①コブラ型の作例が多く、6～7世紀は③ムチリンダ型、8世紀以降はガードストーン上において②人格化型が数多く見られる。①コブラ型と③ムチリンダ型のナーガの龍蓋の造形は、大きく2つに分かれ、Aの頭部が小さく、各頭部が重なり合い、扇状に広がる場合と、Bの頭部が大きく鼻先が突起し、龍蓋が一体化し縦に長く広がる場合である。①コブラ型では、インドやスリランカでは2世紀にAの形で伝わるが、カンボジアではBに近いが独自の形で発展したと考えられる。②人格化型では、1～2世紀にインドからスリランカへ伝播し、特に8～9世紀に盛んに造立されたガードストーン上のナーガラージャ像は5世紀後半のアジャンターの作例と酷似しており、大きな影響があったことが窺える。なお、東南アジア各国では、②人格化型の作例は見出されなかった。③ムチリンダ型では、3

～4世紀にインドからスリランカへAの形で作例が渡り、6～7世紀のスリランカで作例が同時代のタイとベトナムに影響を与えたとみられる。一方、カンボジアではBの形が発展し、その後タイやベトナムにも伝わったと考えられる(図13～15)。

以上のように、インドからスリランカへ3種類のナーガラージャ像が伝播し、特に8～9世紀にはナーガラージャ型ガードストーンが数多く造られた。しかし、東南アジアには人格化されたナーガラージャ像は見出せず、ムチリンダ型の作例が盛んに造られた。したがって、スリランカのガードストーン上のナーガラージャ像は、インドから伝わった後、独自の形で発展を遂げたことがわかった。今後は、ガードストーン上のナーガラージャはインドの5世紀頃の作例の表現に酷似していることがわかったため、同時代のインドの他の作例やスリランカの菩薩像に与えた影響などについて考察を深めたい。

[注]

- ¹ James Fergusson, *TREE & SERPENT WORSHIP: OR ILLUSTRATIONS OF MYTHOLOGY AND ART IN INDIA: IN THE FIRST AND FOURTH CENTURIES AFTER CHRIST: FROM THE SCULPTURES OF THE BUDDHIST TOPES AT SANCHI AND AMARAVATI*, ASIAN EDUCATIONAL SERVICES, 2004
- ² Schroeder, U. V., *Buddhist sculptures of Sri Lanka*, Visual Dharma Publications, 1990
- ³ M・エリアーデ著・久米博訳『エリアーデ著作集 第二巻 豊穡と再生 宗教学概論 2』せりか書房、1991年

- ⁴ M・エリアーデ、前掲書、61頁
- ⁵ 同上、69頁
- ⁶ 荒川紘『龍の起源』紀伊国屋書店、1996年、31～32頁
- ⁷ ハインリッヒ・ツィンマー著・宮元啓一訳『インド・アート－神話と象徴』せりか書房、1988年、90頁
- ⁸ 肥塚隆・宮治昭編『世界美術大全集 東洋編 第13巻 インド(1)』小学館、2000年、図版101
- ⁹ K. P. Poonacha, *Excavations at KANAGANAHALLI (Sannati, Dist. Gulbarga, Karnataka), memoirs of the archaeological survey of india No. 6*, THE DIRECTOR GENERAL ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF INDIA JANPATH, NEW DELHI, 2011, pp. 362-363, 424
- ¹⁰ K. P. Poonacha, *op. cit.*, p. 462
- ¹¹ 肥塚隆・宮治昭、図版131
- ¹² Deborah E. Klimburg-Salter, *BUDDHA IN INDIEN: Die frühindische Skulptur von König Aśoka bis zur Guptazeit*, Kunsthistorisches Museum Wien, 1995, p. 131
- ¹³ John Guy, *LOST KINGDOMS HINDU-BUDDHIST SCULPTURE OF EARLY SOUTHEAST ASIA*, The Metropolitan Museum of Art, New York, 2014, p. 44
- ¹⁴ 東京国立博物館他編『アンコールワットとクメール美術の1000年展』図録、朝日新聞社、1997年、100～101頁
- ¹⁵ 同上、112～113頁
- ¹⁶ 聖天ヴェーダを盗んだ魔人を退治し、ヴェーダを取り戻した馬頭人身のヴィシユヌの化身。聖天の守護神として信仰された。ハヤシラスとも呼ばれる。東京国立博物

- 館、前掲書、1997年、60～61頁
- ¹⁷ 東武美術館他編『ブッタ展－大いなる旅路』図録、NHK、1998年、50頁
- ¹⁸ 東京国立博物館、前掲書、1997年、152頁
- ¹⁹ 神と阿修羅が、ヴィシュヌの化身である亀が背負う山に大蛇ヴァースキを巻きつけ、引っ張り合い、ミルクの海をかき混ぜて不死の薬アマリタ（甘露）を取り出したというヒンドゥー神話。
- ²⁰ Čhirā Čhongkon, *National Museum, Bangkok*, 1999, DV9
- ²¹ *Ibid*, DV72
- ²² 東京国立博物館他『日タイ修好100周年記念「タイ美術展」図録』朝日新聞社、1987年、図版71
- ²³ 東京国立博物館他編『特別展 スリランカ 輝く島の美に会おう』展図録、読売新聞社、2008年
- ²⁴ Schroeder, U.V., *op. cit.*, p. 94, 17B
- ²⁵ *Ibid*, p. 74, 7E
- ²⁶ *Ibid*, p. 86, 13A
- ²⁷ *Ibid*, p. 86-87, 13C
- ²⁸ *Ibid*, p. 75, 7F
- ²⁹ *Ibid*, p. 75, 7G
- ³⁰ *Ibid*, p. 75, 7D
- ³¹ *Ibid*, p. 74, 7A
- ³² *Ibid*, p. 340, 100D
- ³³ 東京国立博物館他編、69、202頁
- ³⁴ シュレーダーによれば、19世紀のハンデッサ寺院でもキャンディ時代のムチリンダ型の作例が1点見出されている。
- ³⁵ Leelananda Prematilleke, *History and Archaeology of Sri Lanka Volume II THE ART AND ARCHAEOLOGY OF SRI LANKA I ARCHAEOLOGY ARCHITECTURE*

SCULPTURE, Central Cultural Fund Ministry of Cultural Affairs, 2007, p. 744

³⁶ *Ibid*, p. 746, 754

³⁷ John Guy, *op. cit.*, p. 8, Fig. 9

【図版出典】

- ・図1：肥塚隆・宮治昭、前掲書、2000年、図版20
- ・図2：K. P. Poonacha. *op. cit.*, p. 412
- ・図3：肥塚隆・宮治昭、前掲書、2000年、図版107
- ・図4：同上、図版211
- ・図5：東京国立博物館、前掲書、1997年、115頁
- ・図6：九州国立博物館『日タイ修好130周年記念特別展 タイ～仏の国の輝き～』、日本経済新聞社、2017年、図版33
- ・図7：John Guy, *op. cit.*, Fig. 59
- ・図8、11：稿者撮影
- ・図9：John Guy, *op. cit.*, Fig. 9
- ・図10：Schroeder, U.V., *op. cit.*, p. 131, 27E
- ・図12：Walter M. Spink・Naomichi Yamaguchi, *AJANTA: HISTORY AND DEVELOPMENT VOLUME 6 DEFINING FEATURES*, BRILL, 2014, Fig. 245
- ・図13～15：稿者作成

【謝辞】

本稿執筆にあたっては、九州国立博物館の原田あゆみ先生、武蔵野美術大学造形文化・美学美術史研究室教授朴亨國先生、査読委員の先生方に貴重な助言と懇切なご指導を賜り、訂正、補筆できました。紙面を拝借して、感謝申し上げます。



図1 龍王立像、紀元前1世紀、インド、
パールフット、コルカタ・インド博
物館



図2 ムチリンダ龍王、紀元前1世紀～紀元
後3世紀、インド、カナガナハハリ



図3 ナーガに守護されるストゥーパ、
2世紀、インド、アマラーヴァ
ティー、チェンナイ博物館



図4 龍王・龍妃、5世紀後半、インド、
アジャンター第19窟前庭左壁

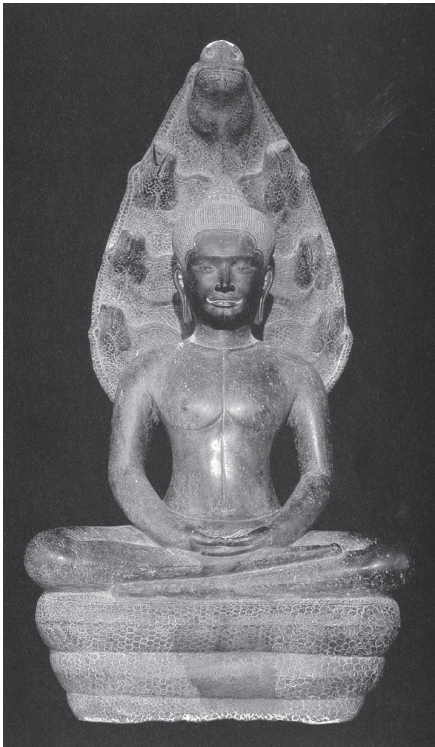


図5 ナーガ上のブッダ、11世紀後半、カンボジア、ペアン・チュンの農園、プノンペン国立博物館

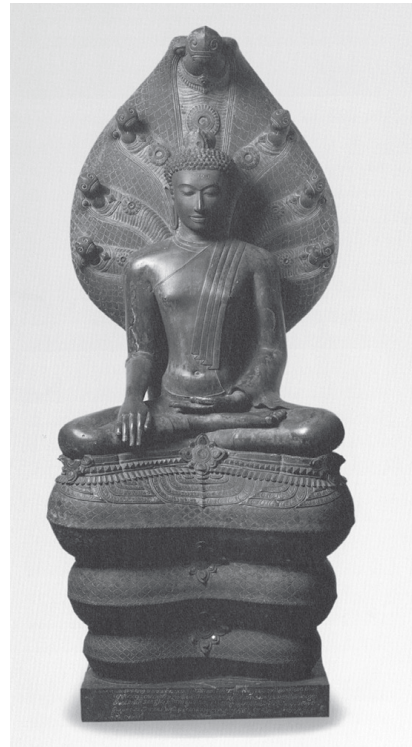


図6 ナーガ上の仏陀坐像、12～13世紀、タイ、ワット・ウィアン、バンコク国立博物館



図7 ナーガ上の仏陀、6世紀、ベトナム、ミーソン



図8 ナーガラージャ像（ワーハルカダの向かって右側）、1～2世紀、スリランカ、ミヒンタレー、カンタカチエーティヤ



図9 ムチリンダ龍王の護仏浮彫、3~4世紀、南インド制作、スリランカ、アヌラダプラ出土



図10 ムチリンダ上の仏陀、8世紀、スリランカ、セールウィラ



図11 ナーガラージャ型ガードストーン、8~9世紀、スリランカ、ラトナパーサーダ



図12 ナーガラージャ像、5世紀、インド、アジャンター第22窟



図 13 ナーガラージャ像分布図 紀元前2世紀～紀元後2世紀

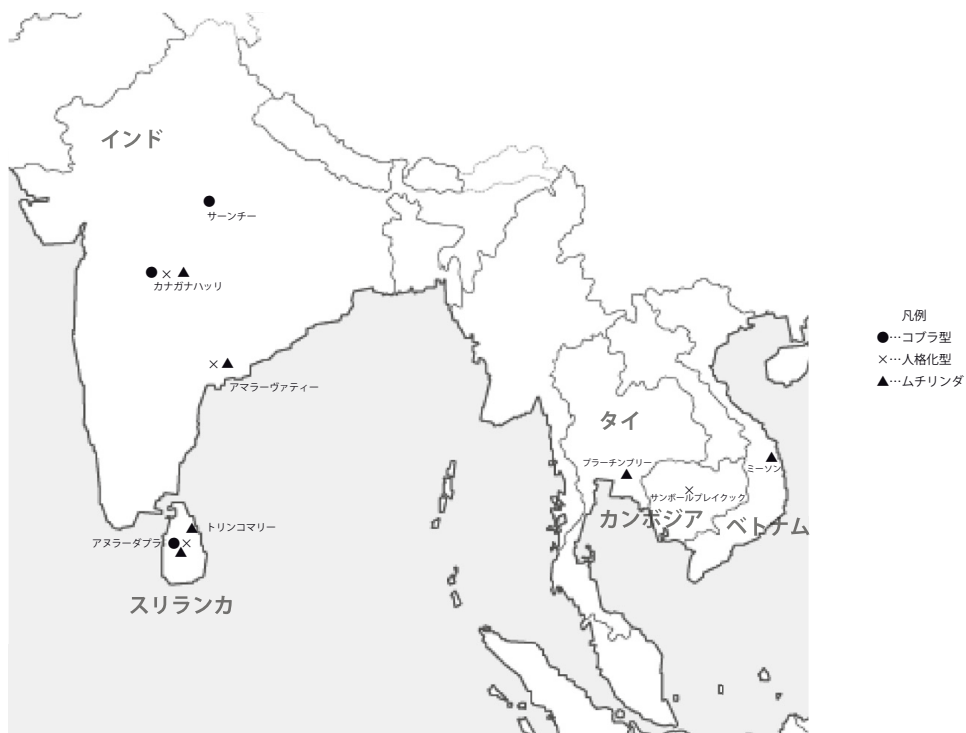


図 14 ナーガラージャ像分布図 3世紀～7世紀



図 15 ナーガラージャ像分布図 8世紀～15世紀